四つの変罪

六弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四つの変罪

【Ｎコード】
Ｎ１６４６ＢＡ

【作者名】
六弦

【あらすじ】
興奮、
嫉妬、
後悔、
情欲、

四つの変罪（？）を背負った人間たちがいた。

罪と向き合うか。

罪に背を向けるか。

四つの罪を犯した者たちの物語。

※「非日常の果て」は幻創文庫でオリジナルが閲覧できます。

※注意

この短編集は私の初めての作品です

内容も表現もヘタクソですが暖かい目で見守って下さい

1

非日常の果て

友達と歩く。

「なぁ順、」

名前を呼ばれる。

「なんだよ？」

返事を返す。

「いや、なんか平和だな～とか思っちゃって（笑）」

「あのな、総司。平和が一番に決まってるだろ」

俺は児玉（こだま）　順（じゅん）

メガネで髪が若干長い。
成績は学年で１０位以内に入る（ドヤ
運動は…それなりにできる

「でもよォ～、何かつまんねーじゃん？」

俺の友達、吉川（よしかわ）　総司（そうじ）

短髪の野球部。
クラスのムードメーカー。
こいつとは小学校からの付き合いだ。
ひょうひょうとして、女好き。
頭は悪いが勉強しない。
俺とは正反対の存在だ。

「あ～マジ何か起きねぇかな…」
また総司だ。

「そういえば通り魔の連続殺人ってこの辺だったよな…」

「あー…多分な」

「そんなに何か起こしたいなら、一緒に通り魔でも探すか？（笑）」

「…いや、やめとく」

冗談だったものの、どこか返事が素っ気ない。

「てかお前スリルを求めろよ～。そんなんじゃ人生つまんなくねぇ？非日常は楽しいもんだぜ？」

「こんなもんだろ、人生なんて…」

非日常、か…

話している間に別れ道についた。

俺達はここから別れる。

「じゃあな。」

「おぅ。スリルが欲しければいつでもウチに来な」

「いらないって」

総司はダルそうに歩いて行った。

非日常…スリル…

俺が常に求め続けているものだ。

万引きや深夜徘徊、車場荒らしなんかじゃもう満たされない。

今までにない何かが欲しかった。

だから俺は通り魔になった。

と言っても、俺は偽者だ。

ただ、通り魔に便乗して人を殺すだけ。

そんな偽の存在だ。

総司には悪いが…

俺はもう、お前以上にスリルを感じているんだ。

人を殺すこと。

最高だよ、総司。

お前もやってみろよ。

きっと依存症になっちまうぜ。

ん…

もう6時半か

さて、

非日常を楽しみにでも行きますか。

俺はコートを着て、マスクと帽子とナイフをその中に隠した。

外は真っ暗だ。

さて、今日はどこに行こうか。

「…順？」

突然、後ろから声をかけられた。

「お前が勉強しないで外ほっつき歩くなんて珍しいな。」

「別に…ただの散歩だよ」

「？　そうか…」

そいつは、ダルそうに歩いて行った。
今日の帰りのように。

総司…

通り魔に遭ったって知らないぜ？

まぁ…俺が今から通り魔になるんだけどね。

しかし…

あいつ、あんなコート持ってたのか。
最近寒いんだから学校に着ていけよ…

俺は路地裏に入った。
用意したマスクと帽子を被る。

そして、ナイフを取り出した。

さて…

誰を殺そうかな？

同級生でも切り刻んでやろうかな。

道に出ようとした、その時。

女性の悲鳴が聞こえた。

まさか…

通り魔か！

俺は悲鳴の方向に走っていった。

どこだ。

どこから聞こえたんだ。

我を忘れて走る。

！

ついに、見つけた。

俺のスリルの源。

帽子、コート、大きめのナイフ。
ガスマスクのようなものを付けている。
そして、その横に転がる血まみれの死体。

こいつが、連続殺人事件の犯人なのか。

通り魔は、ゆっくりとこちらに歩いてくる。
だが…勝てる気がしない。

逃げる。

逃げる。

逃げる。

だが…そう上手くは行かない。

「く…」

行き止まりだ。

奴が迫ってくる。

やるしかないか…
俺はナイフを取り出した。

だけど俺は、
戦い方なんて知らない。

それは、今までの相手が「普通」だったから。
俺の姿はモロ通り魔だ。
見たら普通逃げ出す。

でも、こいつは違う。
俺を殺そうとしている。
そりゃあもう敵うはずない。
俺はあっけなく腹を刺された。
死ぬ。
死ぬ？

違う。
俺はこんなのは求めていない。
俺が死ぬ世界なんてあり得ない。
そんな世界、あってはいけない。
誰か…
俺は携帯を手に取った。
誰でもいい。
履歴から適当に着信をいれた。
聞き覚えのある着信音が鳴った。
この曲は…

そうか…
そうだったのか。
「―…」
通り魔が何か言う。
聞き取りづらい。

だけど確実に、俺の名前を呼んでいた。

この曲。

取り出した携帯。

…総司

お前だったのか。

お前も、俺と同じことを考えていたのか。

人を殺すこと。

これが、お前の「非日常」か？

お前は俺より早く、人を殺すことのスリルと快感を知っていたんだな。

死ぬこと。

それが、俺の「非日常」だったのかもしれないな。

そこで、俺の意識は途切れた。

もう1人の通り魔・児玉順はあっけなく死んだ。

その4日後。

吉川総司（16）が、通り魔により殺害された。

2

連鎖する嫉妬

うふふふ。

また告白されちゃった。

私の名前は伊戸（いと）　茉奈香（まなか）。

高校１年生。

高校生に入ってから告白された回数は今日で１６回。

私は可愛いの。
だから告白される。
そうでしょ？

クラスの人は何も言わないけど、

絶対私に気があるでしょ。

ほら、目が合った。

何よキモイ。

私で変な妄想しないでよキモオタ。

まぁ私はクラスでも人気だから仕方ないこととして許してあげるけど。

でもね、

隣のクラスにウザイのがいるの。

長谷道（はせどう）　和音（かずね）

いつも男子と仲良さそうに話してる。
タラシでヤ〇マンの癖に。

だからね、
私がね、
殺してあげるの。

ほら、そしたらソイツの側にいる男子は、私を見てくれるでしょ？
あ、そうだ。
ウザイのはもう1人いるんだった。
倉川（くらかわ）　未希（みき）
男子に囲まれてニヤついてんなよ。
顔の皮ぜんぶ剥がしたろか。

でね、
今、どっちから殺すか迷ってるの。

やっぱり同じ部活の未希からだよね。

どうやって殺そうかなぁ。

今部屋にあるのは…

注射器、覚醒剤、硫酸、毒、ハサミ、やすり、かんな、ノコギリ、チェーンソー、ガソリン、マッチ

これくらいかな。

よし、呼び出しちゃお。

「もしもし、未希？茉奈香だけど」

『茉奈香？どうしたの？』

「暇だったらさ、ウチに来ない？1人って寂しい、」

『いいよ～。今準備するから待っててね』ガチャ

馬鹿な女。

ピンポーン

あ、来た

わざわざ殺されに来るなんて。
おっと、ついつい口が…

我慢我慢。

「未希、」

「茉奈香～。会いたかった～（笑）」

ウゼぇよ。
こちとらツラ見たくねぇんだよクソが。

「うん、私も～（笑）」
とりあえず部屋にあがる。

「あ、お茶持ってくるね。」

「ありがと～（。・▽・。）」

さて、毒でも盛るかな。

あ、睡眠薬がある。

これにしよっと。

「お待たせ」

「ありがと～」

もっと心がこもった喋り方できねぇのかクズ野郎。

あ、飲んだ

「んぅ…。」

「どうしたの？眠いの？」

「ん～まぁ、電話来たとき寝てたからねー（笑）」

これから永遠に寝るんだよね。

よし、全部飲んだ。

「あ、そうだ。ちょっと待っててね」

「うん！」

さぁ、

どうなるかな。

ダンッ

部屋で倒れる音がした。

さぁ、

拷問部屋にご案内いたします。

「目が覚めた？うふふふ」

未希は目を覚ました。

「ん…　ん！？」

体が縛られている。

「何…これ」

「何って…拷問に決まってるじゃん」

「拷…問？」

言ってる意味がわからない。

茉奈香ちゃん…何で？

「あ、部屋からいろいろ持ってくるから待っててね」

茉奈香は上にあがる。

さてと、

何を使おうかな☆

「お待たせ〜」

「――――ッ！！？？」

茉奈香が持ってきたのは、いろいろな刃物と薬物だった。

「ちょ…嫌…」

「私だってこんな事したくないよ。でもね、未希が悪いんだよ」

「え…？」

「未希がモテるから、悪いんだよ？」

言葉が出ない。

理由が不理屈だ。

「そんなの…知らないよ、」

「知らない？知らないの？知らないんだ？ふーん」

「…知らねぇワケねぇだろうが！！！」

茉奈香が右肩に包丁を振り下ろしてきた。

「っ！！　痛っ…アァァァァァァァ！！！！！！！！」

痛い。
血が流れる。

「知・ら・な・い？知らないワケないでしょ。男に囲まれてあんなにニヤニヤして」

「痛…ぃ…アァ」

「痛いの？じゃあ痛みを和らげてあげる」

そう言って茉奈香は…

チェーンソーの刃を未希の左肩に入れた。

「ウァ゛ァァ゛ァ゛ァァァァァァ痛い痛い痛い痛いィィィィ！！！」

痛い。
血が吹き出す。
痛くて涙が溢れ出す。
そして、未希の左腕は肩から切り落とされた。

「これで右の痛みが消えたでしょ？」

「ィァ…やめてよ…茉奈香」

「どうして？悪いのは未希だよ？だから未希が死ねばいいんだよ？」

「ワ…私が何かしたなら…ァ、謝るから…お願い、許して…」

「謝っても未来は変わらないよ」

「死ネ、」

「――――ッ！！！アア〝ァァァ痛ァァァァァァァ！！！」

脚が…ァ…

「次は左ね☆」

「イャァァ〝ァァァァァ…！！！！」

未希の両足は無くなった。

「うふふふふ」

それを見て喜ぶ茉奈香。

「未希は、アレで死なせてあげるね」

そう言って茉奈香は未希の首にロープを通す。
そのロープは天井の滑車に繋がっている。
「これで、この重りを落とせばロープが引っ張られる仕掛けよ。」
「茉…奈…香…？」
「うふふふ。さよなら」
茉奈香は仕掛けを作動させた。
未希は天井に吊り上げられた。
「私より人気者がいてはいけない」
「…存在してはならないの」
茉奈香は、血まみれの拷問室を後にした。
「和音ちゃん…」
自分の携帯の待受画面を見つめる。
「すぐ楽にしてあげるからね。うふふふ」

「あ、和音ちゃん？」

『うん、どうしたの？』

「暇ならウチ来ない？」

『行く行く～』

馬鹿な女ｐａｒｔ２。

こいつには、アレ使おーかな。

うふふふ。

うふふふふふふふふふふふふふふピンポーン

あ、早いな。

ガチャ

「和音ちゃん、」

「お邪魔します」

あのメス豚よりはいくらか礼儀いいんだね。

「じゃお茶持ってくるから上で待ってて。」

「うん」

うふふふ。
眠らせてあげる。

「お待たせ」

「ありがとう」

会話が続く。

早く飲めよコラ

死にたいの？

「あ、そうだ。ちょっと後ろ向いてて」

「？　いいよー」

これで眠れ、

「！？　んぐっ……」

和音はその場に倒れた。

「麻酔ってすごいなぁ。あはははは」

さて、準備しよっと。

「ん…」

和音は目を覚ます。

…縛られている。

「目ェ覚めた？うふふふ」

「何…こ、れ」

「天罰よ」

「…天罰？」

「私ね、知ってるの。和音ちゃんの裏。」

「う、裏…？」

「とぼけなくていいよ。私、和音ちゃんが男タラシだって知ってるよ。しかも付き合って金貢がせてあんな事もこんな事もして、用が済んだら別れる。これの繰り返し。でしょ？」

「それは…」

「何か違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？違うの？んん？」

狂ってる…

茉奈香ちゃん…どうしちゃったの…

「何か言ったら？ぶりっ子ちゃん？」

斧で壁をガンガン叩きながら茉奈香が言う。

「何も言わないならそれでもいいけどね」

「…茉奈香ちゃんだって同じでしょ」

「…あ　ぇ？」

「茉奈香ちゃんだって、私と同…！！？？」

和音の左脚は付け根から斧で叩き切られた。

「いｔ…アァァァァァァァ！！！？？」

「誰が、お前と、同じ、だって！？」

トンカチで和音の頭をガンガン叩く茉奈香。

「まぁ…いいよ。お前はアイツとは違う殺し方してあげるから。」

「アイツ…？…！！！？？」

和音の目に、未希の死体がうつった。

なっ…

何これ…

首を吊ってる死体。

両足と左腕が無い。

だが、顔は明らかに未希。

和音は吐きそうになる。

「お前は大丈夫よ、違う殺法だから。じゃあまず、ズボン脱ごうか」

ハサミとナイフで切っていく。

「イヤ…」

「うん、まぁこんなもんか。」

腹から股にかけてを切られた。

「じゃあこれ使おっか」

それって…

硫…酸?

「お前はヤ〇マンだからね。こいつとは罰の類が違う」

そう言って茉奈香は、和音の下腹部に硫酸を垂らす。いや、流す。

「ゥ…痛い痛い痛い痛い痛い痛いアァァァァァァ!!!!!」

皮膚がとける。

「お前にも私にも共通するよね。ここ」

また硫酸を流す。

「…二度とできない体にしてやるよ」

「ゃ…め、ア゛ァァ゛ァ゛ァ゛ァァァァ」

和音の下腹部には、もう皮膚が無い。

「子宮って溶かせばどうなるんだろう。うふふふふふふ」

それからどのくらい経ったのか。

和音の下腹部は、何もなくスカスカになった。

「ァウ…ゥ…アァ…」

「まだ生きてんの？じゃあ仕方ないね。」

茉奈香は、チェーンソーを取り出す。

「首さよなら。」

そう言って躊躇なく和音の首を切っていく。
悲鳴を上げる暇もなく、和音の首は床に落ちた。

「ふぅ…これで邪魔者は消えたでしょ。うふふふふふふふ」

「いいね、ここ」

「！！！？？？」

いつの間に…誰！？

…

長い髪…赤いメガネ…

「美久（みく）…」

山下（やました）　美久（みく）

学年の成績トップ。
男子に、結構人気の女…
こいつも、殺さなきゃ。

「…わざわざ殺されに来たの？」

「伊戸さんには１００％無理。」

ウザイ。

お前は死ぬんだよ。

「ふぅーん。じゃあ可能にしてあげる」

茉奈香はチェーンソーを持って山下に近づく。

その時、

山下が拳銃を突きつけてきた。

「…え？」

「本物だよ、ほら」

そう言って山下は茉奈香の足を撃つ。

「！！　ウアァ！！！」

茉奈香はその場に倒れた。

しかし、痛がる暇は無かった。

茉奈香は、頭を撃たれて即死した。

「うふふふ。さよなら、伊戸さん」

山下は血まみれの拷問室を後にした。

3

逃げる男

「うーん」

俺は田中（たなか）　都良（とら）

肉がない事以外は普通の社会人だ。

俺は骨。

眼球は無いけど景色が見える。

胃腸はないけど腹が減る。
脳は無いけど考える事ができる。
すれちがう奴らはみんな俺を見て驚いた様な顔をする。
そりゃそうだよな。
つーか、
「…何でこうなったんだっけ？」
そうだ。あの日だ。
あの日から俺は骨になったんだ。
――5ヶ月前
俺がまだ「人間」だった時の事だ。
突然だった。
沙織（さおり）が、いきなり言ったんだ。

「ごめん。別れて」

「理由を…、聞かせてほしい」

「っ……　ごめん…」

そう言って俺に背を向けた。

俺は沙織が本気で好きだった。

沙織を愛していたんだ。

俺は…現状を受け入れられなかった。

頭がゴチャゴチャになって、そして――――

そこからが、よく思い出せない。

「うーん…」

ダメだ。

どれだけ頑張っても、
あの場所に行っても、
全く思い出せない。

「まぁ…いいか」

思い出すのは肉体を取り戻してからでもいいだろう。

…逃げている？

でも、

「俺」はここにいる。

肉体なんてどこにあるのだろう…

家は隅から隅まで探した。

思い出の場所を記憶を辿って、全て行ってみた。

友達に聞くか？

…今の姿で友達に会って、誰が話を聞いてくれる？

誰が俺を田中都良だと信じてくれる？

誰が…骨と会話する？

俺は完璧に詰んでいた。

あ…

そうだ。

あの人に聞いてみよう。

俺は神社に足を運ぶ。

「界さん、いるか？」

神社の扉が開く。

「おぅ、何かね？」

界(かい)さん。

俺が肉体を探しに神社に行った時に出会った老人。

この人は唯一、俺の存在を認めてくれた。

「また…肉体の事かね？」

「察しがいいな。そうなんだ」

「ふむ…やはり、記憶を思い出せない事と関係があるのではないか？」

確かに、そうかもしれない。

どうしても思い出せない部分…

それが関係してるとしか思えない。

でも、何となく考えてる事はある。

それは、自殺だ。

俺は沙織にフラれたショックで自殺した。

そして、沙織への未練で死にきれず、中途半端に生と死をさまよっている。

それが俺の考え。

だから、沙織に会えば成仏かもしくは肉体を取り戻せるのではないかと考えている。

でもそれじゃ思い出せない部分の記憶は…

「うーん、何とか思い出してみるよ。ありがとう」

「おぅ。肉体が戻ってもわしに会いに来いよ。餅でも奢ってやろう」

「あはは。どうも」

俺は神社を後にした。

次に俺は、墓地に行ってみた。

死んだなら、墓くらいあるだろう…

でも、俺の苗字…どこにでもいるんだよな…

「まぁ…探してみるかな」

「田中家之墓」を探す。

…いくつもある。

「ん…？」

珍しい苗字だな…これ

その墓を見ると同時に、

戸惑いを隠せなかった。

「六…根…川…？」

それが沙織と同じ苗字だったからだ。

六根川（ろくねがわ）　沙織（さおり）。

珍しい苗字だから、すぐ覚える事ができた。

それが…まさか…

「いやいや…」

あ、

そうだ、沙織の母だ。

沙織の母は病弱で、入院していた。

母親の、墓だろう…

「あの…」

「はい？」

しまった！

普通に返事をしてしまった…

「ひ…っ」

やっぱり驚くよなぁ…

相手は、制服姿の女性。

高校生か？

花を持っている。

「あ、いや、これはその、コスプレ的な…」

「あ、え…そうなんですか」

上手く誤魔化せた…のか？

「あなたも、墓参りに？」

少女が言う。

「あ、あぁ…そうなんだよね」

自分の墓を探してたなんて言えないしな…

「君も？墓参りかい？」

「はい、お姉ちゃんの」

そう言って少女は、

六根川家之墓に花を置いた。

「…え？」

「お姉ちゃん、５ヶ月くらい前に亡くなったんです」

…５ヶ月？

「…死因は？」

「…未だにわかってません、」

「……」

「あなたは誰が…あれ？」

俺は、走って墓地から出た。

オモイ…ダシタ？

アナタガ…ワタシヲ…ソウデショ？

スベテヲオモイダシナサイ…トラ

家に着いた。

何も考えられない。

何も考えたくない。

まさか…

俺が…？

……

そうだ、

あの場所に行こう。

俺と沙織が別れた場所。

あそこに行けば、何かわかる。

俺は暗い中、外にでた。

午前3時の外は、誰もいない。

こんな時間だもんな。
ここを右に曲がって…
こっちを左。

…着いた。

ベンチと、自販機と、ゴミ箱。

…オモイダシタ？

アナタガワタシヲ…

ダカラワタシハ、ウバッタノ

アナタノ体ヲ…私ノ形ニシテ…

「思い出したよ、沙織」

そう…

全てを思い出した。

沙織は死んだ。

いや、俺が殺した。

あの時、この場所で。

頭がゴチャゴチャしてた俺は、ゴミ箱に入っていた瓶を取り出し、

背を向けた沙織を――

思い切り、ぶっ叩いた。

沙織は、あっけなく死んだ。

その後、俺は逃げたんだ。

家に着いたら既に骨だった。

それから5ヶ月、それが何故かも思い出せないまま過ごしてきた。

いや、思い出したくなかったのか。

ずっと自分の罪から逃げてきた。

「俺はずっと逃げてきた…沙織、お前を俺が殺したなんて…認めたくなかったんだ…」

「ソウ、アナタニゲテタ」

「ワタシヲ、オキザリニシテ」

「俺は…どうなるんだ」

「ソレハ…アナタガキメルコト」

「そうか…じゃあ」

「俺を…返してほしい」

「ソウ、ワカッタ。ホラ」

戻った…

俺が俺に戻った。

「コレカラ、ドウスルノ」

「俺は…お前に追いていく」

「ワタシニ…？」

「俺はやっぱり…お前がいなければ生きていけない」

「アナタガコロシタノニ…」

「だからこそだ」

「ジャア…ワタシニツイテキテ」

沙織と手を繋ぐ。

懐かしい感触だ…

付き合っていた時もこうして手を繋いだな…

なんだろう…

なんだか、自分の中の罪が洗われていくようだ…

俺達は今空を飛んでいる。

「サァ…天国マデモウスコシ」

天国か…

俺は、また逃げたんだな。

だって、自首すればいいだけだ。

それを、自分の罪と向き合うのが怖くて死を選んだ。

俺は、逃げてばっかりの人間だったな。

せめて天国では、

自分に正直でいよう。

俺達は、夜明け空に消えた。

4

人生最期の日の過ごし方

俺？

俺…マジで死ぬの？

そう、あなたは今日死ぬの。

でも今日の何時かは分からない。

…残りの時間を、後悔のないように生きなさい…

なんてことだ。

「なんで…俺…？」

俺が…何をしたんだ。

おかしい。

そうだ、おかしいんだ。

この国の神は…おかしい

２０２０年、日本

車は普通に道路を走る。

携帯もさほど変わった事はない。

変わったのなんて、日本がクラリス教になったくらいだ。

クラリス教。

自分の命日になれば、クラリスと呼ばれる神が夢の中で自分の死を

告げる。

そして、そのお告げを聞いた人間は必ずその日に死ぬ。

ただ、死に方は一定ではない。

事故死だったり殺されたり自殺だったり。

突然死んだ人もいるようだ…。

それが始まって6年が経った日本。

俺にもそのお告げが来たんだ…

狂っている…

この国は、狂ってる。

俺は、普通の高校生なんだ。

何事もなく過ごしてきた。

それなのに何故…

「伸幸(のぶゆき)くん、大丈夫？顔白いけど…」

この人は…

「ああ、大丈夫だよ。」

「ならいいけど…」

一雪(かずゆき)　奈々（なな）

美人、清楚、成績優秀、運動もできる。

学年に1人はいる、完璧な人だ。

一雪さん…

俺は、君が欲しい。

その顔…髪…体…

君が全部欲しい。

俺のものにしたい。

どんな手を使ってでも…

———昼休み

俺は、一雪さんをずっと見ていた。

授業中も。

一雪さんの顔を見ているだけで、自然とニヤけてしまう。

今日俺は、

あの人を手に入れる。

あの人を虜にしてやる。

健全な男子諸君、すまないね…

だってよ、

俺は死ぬんだぜ？

お前らだって、いつかは死ぬ。

でもお前らはまだまだ先。

俺はもう今日が終われば死ななきゃいけないんだ。

後悔しないように今日を生きるなら、もうそれしかないじゃん。

俺は、ずっと不幸だった。

小学校の頃は、何か事件があれば俺のせいにされる。

その度に暴れて怪我人を出したんだっけ。

中学校では何故かいじめに遭う。

俺をいじめていた奴は、もう俺が他界させたんだったな。

そんな俺の生きる希望が、一雪さんだ。

だから俺は、あの人を手に入れるんだ。

人生最期の日だ。

やりたい事やったもん勝ちだろ。

しないと後悔が残るからな…

放課後。

いつも通り、係の仕事でプリントを整理している一雪さんがいる。

…それ以外、誰もいない。

「一雪さん、ちょっといい？」

俺は教室に入る。

ドアの鍵を閉める。

逃げられたら困るね。

俺は、いつ死ぬかわからないのだから。

「どうしたの？」

「俺…　…！？、がはっ！？」

なっ…

まさか…

俺…もうすぐ死ぬ？

「だ、大丈夫！？」

こうなったら。

やるしかないな。

「一…雪…さん、いや…奈々」

「何？」

「お、俺は…死ぬ前に、君を、き、君をおオヲオォォぉォ」

俺は、一雪さんを押し倒す。

遠慮はいらない。

死ぬ前の、せめてもの我儘だ。

「の、伸幸くん！？」

焦って頬を染めてる。

ははは。可愛いなぁ。

俺は、持ってきたハサミを取り出した。

「ふは、ふふフふFUふふ」

「い…嫌、ちょっと！？」

女子の制服の構造なんて知らない。

着方も脱ぎ方もわからないものを一枚一枚脱がしてる時間は無い。

持ってきてよかった…

チョキチョキと制服を切っていく。

裁ち鋏だからすんなり切れるのだ。

「うは、うはははは」

「やだ、やめてよ、ちょ、」

シャツを引き裂く。

俺こんなに力があったのか。

人間、頑張れば何でも出来るモンだな。はっはっは。

下着が見えた。

「一雪さん…んふ、ふはははははははは」

容赦しない。

俺は襲いかかった。

「やめ、て、よ！！！」

「へへ、いいだろ、減るモンじゃねぇしよぉ、」

「やめて、よ、馬鹿！！！！！」

――――――ッ！！！？？？

「う…あああああ、あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛！！！！！」

左目を、やられた。

俺は、いじめによるストレスやら何やらで、右の視力がほとんど無に等しい状態だった。

だからいつも左目でしか物を見てなかった。

その左目に、ハサミを…

何も、見えない！

「あああああ！！！どこ行ったクソがぁぁぁ！！！大人しくヤらせろおおおぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

「ひっ…」

驚いたような、可愛い声。

確かに聞き取った。

こっちか！

「ぐ、がはっ、あっ、」

ヤ、ヤバい…

もう立つこともできない。

俺に、死が、近づいている。

俺は立ち上がれない足を引きずりながら、匍匐（ほふく）でなんとか一雪さん

に近づく。

「おt…な…しく、ヤら…せ…うぅ、」

そんな俺を、怯えた目で見る一雪さん。

「ひっ…やだ、来な、ダメ、」

言葉になっていない。

それは俺も同じか…

「俺は…ァ…俺の…俺だけの…かZ…うっ！？」

魂が、吸いとられる様だ。

「うぅあぁぁあぁ、ぁぁァあ、あ〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

ヤバい…死ぬ。

嫌だ、

死にたくない。

俺は、何ひとつやってないぞ。

何も…しないまま…死にたくない、

このままじゃ、死ねない…

嫌だ、あぁぁぁ

最期に、一雪さんの脚に手が触れた。

植田伸幸は、動かなくなった。

それから、稀に幻聴が聞こえるようになった。

一雪さん、一雪さん、と。

学校のいたる所で植田伸幸の霊が現れたという噂も。

「何か…死んだって実感ないね、植田。」

友達が私に話しかける。

「いいよ、アレは。クラスの邪魔だったし…」

「奈々もそーゆー事言うんだね…なんか意外（笑）」

ふふふふふふ…

待ってろよ…一雪奈々…

植田伸幸は、今も一雪奈々を見ている。

どうも。

読んでくれてありがとうございます。

私の初めての作品。

いかがでしたか。

短編集というもの、意外と難しかったです。

次は、連載を書こうかと思ってます。

次の作品でお会いしましょう。

ではノシ

ｂｙ六弦

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1646ba/

四つの変罪

2012年1月4日03時46分発行